



近代国語教育史研究 : 西尾実国語教育論の研究

松崎, 正治

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1989-09-27

(Date of Publication)

2008-07-11

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙1336

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2001336>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	まつ ざき まさ はる 松 崎 正 治	(大阪府)
学位の種類	学 術 博 士	
学位記番号	学博ろ第25号	
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当	
学位授与の日付	平成元年9月22日	
学位論文題目	近代国語教育史研究	—西尾実国語教育論の研究—
審 査 委 員	主査 教授 杉 山 明 男	
	教授 堀 信 夫	教授 池 上 洵 一
	教授 富 本 佳 郎	教授 鈴 木 正 幸

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、わが国の近代化の過程の中でその先駆的役割を果たした学校教育の内容について考察した研究論文である。

わが国の近代化にあたって、学校の果たした役割はきわめて大きい。明治5年に、政府は伝統的な学校をすべてにわたって改革し、「国民皆学」というスローガンの下に政府主導型ではあるが、西欧諸国の教育制度を範として、近代学校の形態を作りあげた。その中で、教育内容の編成は難渋を極めたが、多くの先進的な学者によって着々とその成果が達成されていった。

本論文は、そのような近代学校の成立の経過の一部である教育内容史の一つの分野である国語教育史の研究であり、その中で最も先駆的な役割を果たした西尾実(1889~1979)の国語教育論を、その成立の過程から克明に検討している論考である。

国語教育を研究してきた学者は少数ではない。しかし、西尾はそのなかにあって傑出した研究者であった。戦前から戦後にかけて、西尾は一貫して我が国の国語教育学確立に主導的役割を果たしてきたのであるが、本論文は、資料にもとづき、西尾の教育論を克明にあとづけ、紹介し、それを整理、分析して全体像を明らかにするとともにこれを近代化を志向した我が国の教育思想史の上に位置付けようと試みている。

本論文の全体的構成は、以下の通りで、全2部、10章からなっている。(400字詰原稿用紙概算1500枚)

序章 研究の主題と方法および各章の要旨

第1部 戦前の西尾実国語教育論

第1章 行的認識の教育論

第1節 研究の対象と目的

第2節 行的認識の教育論の成立過程

第3節 行的認識の教育論の特色と意義

第2章 読方教育論の構築

第1節 初期の読方教育論 —『国語国文の教育』まで—

第2節 読方の教材論, 学習指導論 —岩波『国語』の編集—

第3章 綴方教育の共同研究 —実証的国語教育研究—

第1節 研究の対象と目的

第2節 共同研究のあゆみ

第3節 作文力発達の研究・系統案の研究の流れ

第4節 西尾実の綴方教育論の成立

第5節 西尾実の綴方教育論の実践化

第6節 西尾実綴方教育研究の意義と課題

第4章 言語活動主義の提唱

第1節 時期区分

第2節 問題提起の時期

第3節 新領域提唱の時期

第4節 言語活動主義充実の時期

第5節 言語活動主義の戦前の一応の完成期

第5章 国語教育における教育課程近代化

—小倉金之助による数学教育の教育課程近代化と西尾実による国語教育の教育課程近代化—

第1節 研究の対象と目的

第2節 小倉金之助による数学教育の教育課程近代化

第3節 西尾実による国語教育の教育課程近代化

第4節 小倉金之助・西尾実両者の改造論の比較考察による史的位置付け

第2部 戦後の西尾実国語教育論

第6章 言語生活主義の成立

第1節 言語活動主義が戦後の言語生活主義に結実した時期

第2節 西尾・時枝論争と国語教育学への志向

第3節 西尾実国語教育論の現場への浸透

第7章 文学教育論の展開 —個性伸長論の過程—

第1節 時期区分

第2節 文学教育論の展開

第8章 書くことの教育論の展開

第1節 研究の対象と目的

第2節 書くことの教育論の成立過程

第3節 書くことの教育論の展開 —創作指導論の発展—

第4節 戦後作文教育史における西尾実の書くことの教育論の位置

第9章 西尾実国語教育学の構築

第1節 研究の対象と目的

第2節 戦前における国語教育学構築の動き

第3節 戦後教員養成制度の改革と国語教育学樹立への志向

第4節 西尾実国語教育学の成立過程

第5節 西尾実国語教育学の特色と意義

結章 西尾実国語教育論の教育史上の位置づけ

第1節 日本教育史上の位置づけ

第2節 国語教育史上の位置づけ

第3節 残された課題

以下各章毎に概観する。

序章

国語教育研究分野には、基礎研究と臨床研究、比較研究がある。基礎研究は、さらに歴史研究と原論研究に分けられる。歴史研究は、時代別に、古典国語教育史（上古、中古、近世）、近代国語教育史（明治、大正、昭和）、がある。これらは、さらに、実践史、教材史、学習史などに分類でき、読解、読書、作文、綴方などの領域ごとの歴史研究に分化していく。さらに、学説史研究も全体を通じた分野として存在する。

本論文では、近代国語教育史研究の一環として、戦前戦後を通して国語教育理論・実践に指導的役割を果たした西尾実（にしお・みのる）の国語教育論を取り上げたもので、学説史研究としての側面を持つものである。

西尾実の経歴を簡単に紹介すると、1889（明治22）年、長野県下伊那郡豊村に生れ、1910（明治43）年、長野師範学校卒業後、下伊那郡の小学校訓導となり、2年半後退職、1912（明治45）年、東京帝国大学文科大学文学科選科（国文学専攻）に入学、卒業後、中等学校の教員を歴任した後、1918（大正7）年、松本師範学校の教諭となり、その後、『信濃教育』の編集主幹を兼任する。

1926（大正15）年、中等学校の教員を歴任しつつ、1929（昭和4）年、『国語国文の研究』を出版、新進の研究者として認められていった。1933（昭和8）年、『文学』（岩波書店）編集委員、東京女

子大学教授，1934（昭和9）年，国語教育学会常任理事，1935（昭和10）年，中学校用国語教科書『国語』刊，法政大学講師，1941（昭和16）年，文部省の外郭団体である「日本語教育振興会」総主事，東南アジア向けの教科書や雑誌『日本語』の編集にあたる。1943（昭和18）年，「師範学校令」の公布にともない，文部省の中学校，師範学校の教授要日委員，東京高等学校講師となる。1946（昭和21）年，法政大学文学部教授，1947（昭和22）年，『言葉とその文化』（岩波書店）を刊行し，戦後の活動開始，1949（昭和24）年，国立国語研究所初代所長（1960年まで），1951（昭和26）年，『国語教育学の構想』，1957（昭和32）年，『国語教育学序説』刊行，戦後の国語教育に主導的役割を果たした。1960（昭和35）年，「日本文芸史における中世的なものとその展開」によって法政大学から文学博士の学位を受けた。1961（昭和36）年，法政大学名誉教授，国語教育審議会委員，1965年（昭和40）年，成徳短期大学教授，1969（昭和44）年，全日本国語教育学会初代会長，1974（昭和49）年，『西尾実国語教育全集』（全10巻，別巻2，教育出版）刊行開始，1978（昭和53）年，刊行終了，1979（昭和54）年死去。

本論文の作成にあたって著者が参照，検討した文献は，以下の通りである。

- 1) 著作全集以外に，単行本 36冊
- 2) 著作目録，年譜，回想等 14点
- 3) 西尾実の国語教育論に関する研究論文 44点

研究の主題と方法

研究の主題については次の2点が挙げられる。

- 1) 西尾実の国語教育論の成立過程をつぶさにあとづけること。
- 2) 西尾実の国語教育論を教育史上に位置付けること。

研究の方法については次の点が挙げられる。

第1の研究主題に関しては，戦前期においては，≪①西尾実国語教育哲学である行的認識の教育論・②読方教育論・③綴方教育論・④言語活動主義≫の成立過程を，戦後期においては，≪⑤言語生活主義・⑥文学教育論・⑦国語教育学≫の成立過程を，通時的にあとづけ，時代状況や同時代の教育学研究などと関連付けながらあとづける。

第2の研究主題に関しては，西尾実と同様な問題意識を持った，相前後する，あるいは同時代の人物と比較しながら考察する。その観点は，次の3点である。≪①明治教学体制批判・②教育課程近代化・③国語教育学の樹立≫

各章の要旨

本論文は，大別して二つの部分からなっている。第1部では，1910年代から1945年までのおよそ30年間にわたる西尾実国語教育論が形成されてくる過程を考察し，それが教育史上どのような意味を持

つかを検討している。第2部では、戦後になってアメリカ経験主義国語教育理論が導入された中にあって、西尾実国語教育論がどのように進展し、そしてどのようにして国語教育学の樹立を目指すようになったかを検討している。最後に結論として、西尾実国語教育論が持つ教育史上の意義と国語教育史上の意義を明らかにしている。

第1部 戦前の西尾実国語教育論

西尾実国語教育論の中核となる部分は、ほぼ戦前期にまでに形成されている。西尾実は1910（明治43）年22歳の時に尋常小学校の訓導になり、以後大学選科を卒後、中等学校教諭、私立大学教授の立場にあって、国文学研究と国語教育研究を進めてきた。1945（昭和20）年の敗戦時には、57才であった。年齢的にみても国語教育論形成の中核は、この戦前期にあったと見てよい。

敗戦後の十年余の活躍は、戦前期の土台があってこそ展開できたと考察できる。すなわち、言語生活主義を提唱して国語教育実践を先導し、国語教育学の樹立を唱えてその体系を作ることができたと考察できる。

したがって、西尾実国語教育論を論ずる場合、戦前期における国語教育論形成の過程をあとづけることが重要になってくるので、第1部では、その過程を中心に論じ、教育史上に位置付けることを試みている。

第1章「行的認識の教育論」では、まず西尾実の教育哲学である行的認識の教育論の成立過程をあとづけ、これによって行的認識の教育論は、欧米追従型の明治教学体制を批判するところにその起源を持ち、道元の『正法眼蔵』や世阿弥の能芸論、国学研究などの影響を受けて形成されていったことを明らかにした。

次に、行的認識の教育論の特色と意義を第一に教授学的観点と、第二に教育史的観点から考察した。第一の結果として、教授・学習の方法を《一般から特殊へ》という順序構造を《特殊から一般へ》と変えたこと、教材研究の方法・指導過程を伝達可能な形で残したこと、第二の結果として、日本の伝統思想から革新のエネルギーを汲みとって、浮薄な教育を根底から改革しようとした教育者の系譜に、西尾実が位置づくことを明らかにしている。

第2章「読方教育論の構築」では、まず昭和初期までの読方教育論の成立過程をあとづけた。すなわち、西尾実の読方教育論の核心である「主題・構想・叙述」概念の形成過程を考察している。すなわち、西尾実が、主にラフカディオ・ハーン制作論を土台として、試行錯誤を重ねつつ、いかにして概念群を作り上げていったかを追及している。次に、西尾実が編集した教科書『中学校国語漢文科用国語』（岩波書店刊）とその教師用指導書『国語 学習指導の研究』の分析を通して、西尾の学習指導観の特色と意義を考察した。その結果、目標論・教育内容論を明確にしていること、求道精神を持つ教養人を育成することを目指した教材選択、生徒の読みの実態を把握した教材配列・指導法の導入、指導法の体系化への志向、生徒に対する学習方法の教授、作品の読みと生徒の生活との結合への試みなどを整理した。

第3章「綴方教育の共同研究 一実証的国語教育研究一」では、《綴方の資料分析→綴方理論の構

築→綴方実践体系の確立」という過程を探り、以前になされた作文力発達研究の中に西尾実の作文力発達研究を位置付け、西尾実作文教育論の意義と課題を考察している。西尾は、1925（大正14）年から20年近くにわたって、長野県の小学校教師たちと綴方の共同研究を続け、綴る働きの類型を見いだしていき、この類型に基づいて、綴方指導の方法を工夫した。とりわけ、伸び悩む児童に対して推敲と写実により、その伸長を図ること、また国民生活向上のために実用的文種を増加させていくことを志向している。こうした西尾の実証的な綴方教育研究は、大正末期から昭和10年代に試みられた、作文綴方の分析から実証的に作文力の発達を帰納する一連の研究の中に位置付けられる。

第4章「言語活動主義の提唱」では、昭和10年前後から始まった西尾実の言語観改革・教科構造改革である言語活動の成立過程をあとづけている。西尾実の言語活動主義は話しことばを地盤段階にして、その上に書きことばを発展段階・完成段階として定位するものであった。この言語活動主義の成立過程を四期に分けて、時代状況や、教育政策の動向と関連付けて考察した。その結果、言語活動主義は、昭和初期ファシズムの国語教育への政治的介入から相対的自立を図るために、独自の国語観（言語観）をつくるということから、話しことば教育の昂揚、国民学校の発足、海外における日本語教育などに影響されて、形成されていったものである。

第5章「国語教育における教育課程の近代化」では、戦前の西尾実国語教育論の教育史上の位置付けを、小倉金之助の数学教育論と比較しながら、考察した。その結果、小倉金之助が近代数学を数学教育に導入して、数学教育の教育課程の近代化を実現したのと同様な役割を、国語教育において西尾実が果たしていることを指摘し、さらに、両者の教科教育改造論を、①近代化の内実（教育内容編成の仕方／教材の選択／授業過程）②時代とのかかわり③論の継承のされかた④教育史上の位置付け、という観点から比較した。

第2部 戦後の西尾実国語教育論

1945年の敗戦後、西尾実はいちはやく国語教育の在り方を指し示した。戦前から押し進めていた言語活動主義の国語教育論がアメリカの経験主義国語教育と、話し言葉を土台としているという点において一致したために、広く迎えられたのであった。西尾実は言語活動主義を言語生活主義と呼び名を代え、この言語生活主義の国語教育論の体系を整えていく仕事を精力的に推進した。そして教員養成制度の変更によって大学に国語教育関係の講座が設けられるという機運に助けられて、国語教育学を構想するに至った。第2部では、言語生活主義の提唱と、それを国語教育学に展開していく過程をあとづけ、その教育史上の意義を探究した。

第6章「言語生活主義の成立」では、戦前の言語活動主義が戦後、言語生活主義に結実していく過程を明らかにしようとした。そこで、占領軍のローマ字国字論などの国語政策に対抗しながら、西尾実は生活と結びついた言語生活の在り方を説き、最初の学習指導要領（1947年）に影響を与えていったことを分析し、また、時枝誠記との論争を通じて、言語生活主義理論を深めていったことを検討した。さらに、言語生活主義論の実践現場への浸透の状況をあとづけた。

第7章「文学教育論の展開」では、西尾実の文学教育論の展開を戦前の前史を含めて三期に分け、文学教育において個性伸長論を具体化していく過程を考察した。明治末期から大正初期にかけて、白

樺派的個性伸長論に影響されるところから出発し、世阿弥・道元の鍛練主義的な個性伸長論を経て、戦後の大衆教育時代になって《鑑賞の独立》を唱えるようになる過程を明らかにした。さらに、荒木繁の実践に触発されて、文学の機能として《問題意識喚起》があることを見いだしたことをあとづけている。

第8章「書くことの教育論の展開」では、戦前から戦後にいたる西尾実の書くことの教育論の成立展開過程を明らかにした。昭和10年代から書くことの教育論の萌芽が見られ、戦後昭和20年代になって、言語生活主義の中に書くことの教育論として位置付けられた。昭和40年代になって、さらに創作論に展開が見られた。

次に、西尾実の書くことの教育論を戦後作文教育史に位置付ける試みが述べられている。この教育論は1950年代に盛んに論じられた《生活綴方か作文教育か》という論争を、作文教育史の問題史的展望に基づいて止揚し得る方向を示したのであった。第9章「西尾実国語教育学の構築」では、まず国語教育学樹立の動向が戦前から盛んになされていたことを明らかにし、次に戦後教員養成制度改革と西尾実の国語教育学構築との関係を分析した。さらに国語教育学史上および教育史上における西尾実国語教育学の位置付けを試みた。その結果、1930年代から国語教育学の研究が始まり昭和戦前期においては垣内松三の独立講座『国語教育科学』（全12巻。うち9冊のみ刊行、1934～1935年）を頂点として、教育科学としての国語教育学樹立の試みが進捗していた事実を明らかにし、西尾実がこれらの成果を土台として、さらに、戦後の教員養成制度改革に伴う大学における国語教育講座の設置を契機として、言語生活主義に基づいた国語教育学の体系を構築していく過程を明らかにした。さらに西尾実国語教育学が、戦後の「学習指導要領」作成に影響を与えていたこと、戦後の諸家国語教育学説に言語観・指導論レベルで影響を与えていたこと、教員養成学部・大学における国語科教育法・教材研究の授業の基礎となる理論を与えたことを明らかにした。また、教育内容は国家が決定したものに従い、教育技術だけを研究するという、戦前までの教育学研究の方法論を継承していた戦後の教育学研究には、教育内容との関連において教授技術を研究する領域が欠如していたと見るのであられるが、言語生活主義に基づく教育内容研究と教授技術の体系化を試みた西尾の国語教育学は、この空隙を埋めるものであることを明らかにした。加えて、教科教育学研究史における西尾実国語教育学の位置付けも試みている。

結章「西尾実国語教育論の教育史上の位置付け」

第1部・第2部でその成立過程をあとづけた西尾実国語教育論の特質を、日本教育史（特に近代教授理論史）において、および国語教育史において位置付けることを試み、結論とした。

論文審査の結果の要旨

- (1) 本論文は、教育学の領域において、従来から、その体系化が求められている教科教育学についての貴重な研究の一つであるといえる。この分野の研究は、他の分野の研究に比べて、数も少なく、また研究の水準においても遅れていると考えられるが、その中において、本論文は、研究の目的に

独創性がみられ、とくに、西尾実という研究者をとりあげて、その研究を基礎としながら、教科教育学の研究を目指し、また近代教育思想史の分野にも視野を広げている点、現時点においては、研究史的業績の蓄積の浅いこの分野の研究にとって重要な知見を提供するものであるといえることができる。

- (2) 研究の方法においても、西尾実にかかわる広く信頼性のある資料を実に丹念に収集しており、事実調査の点では極めて高く評価すべき研究といえる。さらにそれらの資料を十分に読みこみ、詳細に分析・考察を試みている。その意味では、研究としての水準は極めて高いといえる。

また、未開の研究分野のあらましの見取図を作る作業にも成功しているといえよう。ただ、未開拓分野の研究の常として、一次資料の整理に追われすぎて、論者の問題意識、推論の手順が鮮明でない所も見られた。

- (3) 教育史の研究方法の一つとして、教育内容の近代化という観点から比較教育の方法を採用したこと（第5章）は、国語教育学の分野においては、未開拓の新しい試みであり、それは同時に、この分野だけでなく、広く教育学の研究にとっても重要な問題提起として評価することができる。
- (4) 日本を含め、後発型近代化においては、思想形成面でも、伝統軽視型が主流であるが、西尾のような伝統内在型近代化の例を、教育思想史としてとらえたということが、思想史研究として評価できる。

ただ、同時代の思想状況の中で類型化する作業にもう少し力を注ぐこと、西尾の生い立ち経験等の中から、彼の思惟様式、価値判断のあり方を分析し、彼の行動の必然性を内面から把握すること、この二点に留意し分析を深化させれば、さらに精彩あるものになったであろう。

- (5) 見取図の作成にあたってやや先を急ぎ過ぎている観があり、個々の事実の因果関係や各種相関関係の追及については、一部に甘さが残っている。たとえば、第6章の西尾・時枝論争が両者の発言と論文という現象的側面からのみ考察されているが、両氏の説の対立を招いた文学観の相異の根源とその理由の追及が更に深められるべきであろう。
- (6) 研究の目的からみると、その全てをこの論文において達成したとはいえないし、なお研究し、深めるべき分野も残されている。しかし、先行研究が極めて少ないこの分野の中で、現時点では、むしろここまで到達し得たことをこそ評価すべきである。ここで明らかにされたことは、著者の問題意識の明確さからみて、さらに今後の研究の発展が大いに期待される。また、研究にたいする真摯な態度、さらには研究意欲も十分感じられ。

したがって総合的には、高い評価を与えたい。

以上の理由より本審査委員会は、論文提出者松崎正治が学術博士の学位を授与されるに足りる資格を有するものと判定する。